

鳳凰丸
昇平丸
御軍艦諸記事について

南波松太郎
松木謙哲
石井謙治

昭和四十一年三月神戸商船大学第八回瀬戸内海海事調査団出航に際し、我々三名がこれに参加した。先づ愛媛県温泉郡中島(忽那群島)等の調査を終えて、その帰途同二十八日丸亀市塩飽牛島に寄港し、『塩飽海賊史』の著者真木信夫氏の御案内で海岸にある往時の倉庫群跡の見学後、極楽寺に到り、同寺保管の文書や絵画を見、真木氏のお話を拝聴した。

その際、同島の峠幸吉氏が来会されて、表題の和綴手書本一冊を提示された。これを見つると、今迄世に知られていなかった事の記載があり、大いに一行の興味を惹いたのであった。ここにその概要を述べ、本書の全文を掲げる事とした。なお本書は、真木信夫氏の著書『塩飽海賊史』にその一部(塩飽水主雇備関係の部)が紹介されているが、それ以外の鳳凰丸関係記事は未紹介である。

因みに神戸商船大学では、海事思想の普及とその教育のために将来は日本海事博物館たらしめる夢をもって、昭和三十三年学内

に海事参考館を設立した。たまたま練習船深江丸(一五〇総トン)が竣工したので、先づ本船によって、春夏の休暇を利用して、鉄道線路より離れている瀬戸内海往時の港の海事調査が企てられ、造船、海運は勿論のこと、その土地の伝説、歴史、地理、産物さでは井戸水等に至るまで、海事に関する広範な総合的研究調査を目的として、神戸商船大学瀬戸内海海事調査団が結成された。その第一回の出航は昭和三十五年七月で、爾来毎年一―二回出かけている。しかしすでに、家嶋・直島・塩飽本島・瀬・弓削島・大三島・木ノ江・御手洗・倉橋島・中島・上ノ関・坂出・高松等へ調査に行っているが、なお深く調査の要がある。

なお、当参考館には、江戸期和船に関する模型・図面・文書・船絵馬等の資料を多数蔵し、この蒐集は現在の処日本一と目されている。その他、航海書・海図・手形等貴重な古記録も多く、海事史に関心を寄せられる方は是非とも一見されるようおすすめする。

一 概説

本書は、

- (一) 鳳凰丸艤装の概略
- (二) 鳳凰丸乗組員一覧
- (三) 塩飽水主雇備関係文書
- (四) 嘉永七年三月塩飽出発、浦賀で鳳凰丸に乗組んでから翌年三月までの記録
- (五) 昇平丸長崎廻航時の乗員一覧
- (六) 御台場警備配置

れが竜骨長であることが察せられ、また船体構造を肋骨(まつら)と外板・内張板とで構成し、下半部を銅板で包むという本格的洋式構造を採用していたことも明らかになる。その他、帆装・諸道具・備砲などの艤装に至っては、これほど詳細に記録したものは今まで見当らなかったから、碇や轆轤に洋式と和式とを併用しているというような些細な点まで判明するのである。ともあれ、本史料は鳳凰丸の実態を知るためには、欠かすことのできないものであって、今後の研究に大いに役立つものと思われる。

鳳凰丸は、幕府が大船建造の禁を解くと共に、幕府自らの手によって、浦賀で建造された船で、『日本近世造船史』によると、長さ一三二呎・巾三〇呎の木造三橋バーク型軍艦とあり、嘉永七年(一八五四)五月完成した。その後、慶応二年(一八六六)江戸石川島で改装され、明治維新後まで運輸船として使用された。実質上、日本最初の本格的洋型帆船でありその諸元や艤装の詳細等はこの記録によって、かなり明確にすることが出来る。たとえば、船の長さは一〇七呎で、上記一三〇呎とはかなり喰違っているが、巾(むろん本史料の三五尺の方が正しいと思われる)とのプロポーシヨンによって、こ

昇平丸は安政元年(一八五四)、鹿児島で建造された木造三橋バーク型帆船で、寸法は長さ九〇呎(竜骨長)・巾二四呎と鳳凰丸よりかなり小型である。翌安政二年に幕府に献納され、同年長崎に海軍伝習所が設立された際、伝習生等に乗せて長崎へ廻航された。この時の乗組員が本書末尾に記されているが、洋型船鳳凰丸で約一年間練習を積んだ乗組員が、昇平丸に乗った様子がうかがわれる。鳳凰丸乗組は一年間乗船していたとしても、この記録から見ても余り航海をしていない訳でもないから、恐らく初めての航海であったに違いない。そのためか、あるいは次に述べる船体の欠陥によるためか、この昇平丸の長崎への航海は中々の難航海であった。

薩摩藩は、早くから造船関係の蘭書を訳したりして、洋型船建造の意欲を持っていたため、解禁後直ちに昇平丸を第一

船として同型船を三隻建造した。外見は洋型であったが、建造法の実際を知らなかったため漏水が多く、いづれも余り長く使用されなかった。それにひきかえ鳳凰丸は、見様見真似とはいえ、ベルリの黒船を直接見聞している浦賀で建造されただけに、その成績もよかつたらしく、その後長く使用された。

塩飽諸島は豊臣秀吉以来船方として特権を与えられ、優秀な船乗りとして有名であったため、幕府が初めて洋型軍艦を建造すると同時に、水主三〇名の供出を命ぜられ、日本最初の洋型帆船乗組の主力を占めることになった。以後塩飽出身者多数が、幕府海軍の水主として活躍し、咸臨丸の太平洋横断の際もその水主の半数は塩飽出身者であった。

本書末尾に所有者として記名している峠嘉吉は塩飽牛島出身であるが、最初からの鳳凰丸乗組員ではなく、安政二年正月の第一交代者の一人である。その後昇平丸に塩飽船頭の肩書で乗組んでいるから、塩飽水主の中では主だった者であったらしいが、後年の咸臨丸等の乗組には名が出ておらず、その経歴等は未だ調査されていない。本書の記事中安政二年正月以前の分は、当然所有者峠嘉吉の直接見聞したものであるが、最初の部分に嘉永七年十一月があるなど時間が逆転しているが、その後は順を追って書かれているようである。しかも塩飽の地名には甲生浦を早生しま、立石浦を笠石浦とす

この鳳凰丸及び昇平丸の乗員の中には、その後の幕府海軍で活躍する者の名前も見られ、また最初の海軍が、どのような出身者によって構成されたかを見るにも、本書はよい史料であろう。なお、本史料の校訂に当っては、東大史料編纂所の田中健夫氏の懇切な御示教を得た。ここに記して感謝の意を表する次第である。

二 本文紹介

浦賀

御軍艦鳳凰丸御乗組御名前并御船出来形諸日記控
嘉永七寅年十一月

浦賀
御軍艦鳳凰丸

長式拾壹尋式尺
肩幅五間五尺
深サ式間三尺

一 艦 檣

長式拾五間 但三本統

一 表 檣

長式拾四間式尺 右同断

一 艦遣り出シ檣

長拾五間

一 表遣り出シ檣

長拾間 但左右の角柱
惣間半式本

一 同桁六本

大、長八間、中、長七間
小、長五間、桁遣り出し
三間半四本

るような明らかな誤記があり、これが塩飽出身者あるいは嘉吉自身の記述とは思えないような節もある。

鳳凰丸建造後一年間の行動は、公式記録としては残っていない面白いものが多く、五月以後時々沖へ出て、大砲をブツ放してはその大きな音に驚き、夏ともなれば陸上に長屋住いで交代勤務という、誠に呑気な訓練振りがうかがわれる。また翌年三月江戸近くに碇泊、幕府高官に披露の際は、阿部老中以下に連日見物に押しかけられ、いささか迷惑しているらしい風も見られる。

安政元年十一月四日の東海地方大地震に伴う津浪で、當時たまたま下田に碇泊していたロシア軍艦ディアナ号が破損し、戸田へ廻航の途中沈没した事情が詳しく記録され、当時の下田港の外国船出入状況が記録されているのは、浦賀と下田との密接な関係が物語っている。なお伊豆沖で沈没したディアナ号の代船を戸田で建造した際、日本の船大工が、初めて正式な洋型船建造技術を修得し、この船が君沢型として戸田で六隻、石川島で四隻建造され、その後の洋型船建造の基礎となっているが、鳳凰丸からも中島・佐々倉他大工二名が寸法取りに出かけている。この中島・佐々倉の両人は鳳凰丸建造の功労者であるが、やがて長崎の海軍伝習所に派遣され、佐々倉は後日咸臨丸の運用方教授として、太平洋横断の重責を負うことになる。

一 艦遣り出シ檣

上長六間
下長八間

一 艦ノ帆、下四拾八反、中帆四拾五反、上帆三拾八反

一 表帆、下四拾六反、中帆四拾式反、上帆三拾五反

一 艦袖帆 拾式反

一 表袖帆 拾反

一 表遣り出シ帆、下式拾五反、上二而壹反ニ相成り

一 艦風切帆 上長四間、下長五間式尺 但丈四間五尺 艦行五間三尺 如此式ツ懸候

一 身 繩

一 手 繩

一 御船印吹流シ身繩 式房、長六拾尋宛

一 細 綱 惣数百八拾筋掛ル 但 艦表柱同遣り出し 桁上下ニ遺候分

一 繩階子、艦表下式拾本、中拾六本、上拾式本

一 異国形碇 壹頭 此鉄目百八拾貫目 但シ式本爪ニ而任立

一 同碇綱鉄鎖仕立 長サ百式拾尋 此鉄目五百八拾貫目

一 四ツ爪碇 四頭 但、目方九拾五貫目 五百拾貫目迄

加々芋網 四房 長百武拾尊
但巻房 目方百武拾ノ目

株枳綱 六房 長百武拾尊

楫 一羽 長老丈五尺
榻輻老丈

但し御船の取付候金物は重合
仕立ニ方水バニ相成候分を銅板ニ而包有之候

船中塩硝置場 一所 但式間四方
但厚三寸之杉板ヲ以式重ニ張、惣銅延板ニ而包有之候

接轡 一ヶ所 是は異圍形ニ而仕立有之候

楫取車 一ヶ所 是も異圍形ニ而仕立有之候

艦上段ニ將官御部家 是は居座之左右は明り取窓有
之、波除之ため硝子厚板ヲ以ハ
メ入、外廻りは赤銅ニ而窓蓋致
シ候様仕立有之候

中段ニ御乗組御役人之御部家三拾七ヶ所有之、孰もたゞ
み敷込、左右之部屋ニは明り取窓有之、右同断仕立ニ御
座候

階子 拾挺 但し、式挺は外の上リニ懸、其下リニ式挺
懸リ、上之段中段ハ之通りニ式挺懸リ、
式挺は合羽左右ニ懸リ、式挺は矢倉左右ニ
懸リ有之候

合羽前ニ建燗軸一ヶ所 是は日本之形ニ而出来有之候

小綱 八拾房 但シ、長短太細どもニ御座候

雪隠 三ヶ所 但シ、巻ヶ所は將官部屋脇ニ仕
立有之候、式ヶ所は表左右ニ仕立
有之候

一 台所は表中段ニ仕立有之候
大水筒式ヶ所
煙出しは赤銅ニ而仕立、合羽
上へ煙拔候様仕立有之候

一 艦正面ニ鳳凰形之彫物有之
但し尾広かりは左右ハ五間余
も可有之候、孰も口塗仕立ニ
御座候

一 水押し同断
是は尾は無之、頭・胴斗リニ
而仕立は右同断ニ御座候

一 艦表蘭間腰板
是はから花形ニ而仕立は右同
断ニ御座候

一 バツテラツリ 四ヶ所
是は艦ニ式ヶ所鉄物ニ而仕立
有之候、胴之間ニ式ヶ所榎木ニ
而仕立有之候

一 バツテラ 四絃
長三間半
但し赤塗仕立中黒ニ御座候

一 南蛮 惣数大小共合四百五拾
長七尺、本口六尺

一 大筒 四挺
但老挺ニ付、目方七百八拾貫目
此玉巻ツニ付、七貫五百目宛有之候

一 中筒 六挺
長七尺、本口四尺
但し老挺ニ付、目方三百武拾貫目
此玉巻ツニ付、三貫目宛有之候

一 鎗 五拾本 一 劍附鉄炮 五拾挺

一 惣舳御船出来形、外棚板枚厚五寸、内棚板厚三寸、内外間
ニまつら入、外は伏巻寸板ニ而包、水入ニ相成候処は赤
銅延板ニ而張詰メ、外上廻りは赤塗、中黒仕立、内は黒
塗ニ而仕立有之候

一 帆之御印は横一ニ御座候 以上

コレハ御船荒増ヲ書写もの也
嘉永七寅年十一月

御役掛り御名前

平生船中之観測、砲手之操練 非常之進退一切之櫓機司之	將官一員	將官
将官意ヲ奉承ニ而船中之進退 時辰儀・大小銃之指揮、船中 之観測、将官欠後之時委任之	中倉嶋 三郎輔 佐々倉 桐太郎	中倉嶋 三郎輔 佐々倉 桐太郎
下田足輕役乗組支配、大筒 操出シ方并筒磨方支配役	堀夷 芳次郎	堀夷 芳次郎
小筒改、船中掃除、歩兵具 出シ方支配	朝夷 健次郎	朝夷 健次郎
諸職人預り、船中器械大筒 其外小道具改役	松淵村 源八郎 細淵村 新之丞	松淵村 源八郎 細淵村 新之丞
船中目付、乗組剛臆考役	岡田 増太郎	岡田 増太郎
乗組人数改并劍鎗預り役	白井 源兵衛 柴田 進平	白井 源兵衛 柴田 進平
塩飽其外御抱水夫差配、 諸荷物積込取締役	福西 源兵衛 田中 半右衛門	福西 源兵衛 田中 半右衛門
御船損処改役、船錢量出納 船上下差配	土屋 榮五郎 柴田 仲助	土屋 榮五郎 柴田 仲助
火薬所預り役	込山 織五郎	込山 織五郎

一 玉預り役
土田 喜久郎

一 測量方
岩田 誠一郎

一 絵図方
岩田 誠一郎

一 音楽方
真山 彦七

一 船中掃除方差配
吉村 弥右衛門
春山 弁藏

一 遠覧鏡預り役
山本 金次郎

一 記録方
山中 金次郎

一 水夫其外雜兵賞罰司之
吉村 誠一郎
山本 金次郎

一 印差配役
福西 源兵衛

一 兵粮差配
小野 源次郎

一 梯子預り
土田 喜久郎

一 病人取扱方

後藤 元信 八

一 将家部家入口、梯子入口
一人宛勤之事

岩田 巳之助
寺田 彦次郎
金沢 元次郎
同 鉄太郎

一 右之通、被申渡候間可得其意候、其役々々猶巨細之儀は銘々可申聞候、此般被申渡候

但、番組之人数方同心式拾八人、船宿拾人と相定候故
同心之内頭付式人、封印役一人、地方之内一人は残り
番ニ相成り、不足乗組将官ニ而当日之助役可申附候事

嘉永七寅歳十一月

浦賀御奉行所

戸田伊豆守様
伊沢美作守様
松平伊予守様
土岐豊前守様

寅年五月四日酉御丸に御留守居ニ御殿被遊候
三月廿四日下田奉行ニ御殿被遊候
伊沢棟後役
戸田棟後役

御船打建御用掛り

寅年七月富士見御宮殿に被出候

香山栄左衛門
中嶋三郎輔
樋田多太郎
佐々倉桐太郎
朝夷 捷次郎

福田 源兵衛
中田 嘉太夫

齊藤 太郎助
田中 半右衛門

証文差上申所如件

此度罷下り候私共拾人宛便船ニ而差遣し、夫ニ重立候者に御添翰御渡被成下候間、船中別而相慎、浦賀表着次第早々、御奉行所に御届ケ可申上旨、被仰渡奉畏候、以上

一 此証文は大坂 御奉行所に差上候書付ニ御座候

讃州塩飽水夫惣代

笠嶋浦 善太夫 印
（腰カ） 蔵 爪印
清 助 爪印
市兵衛 爪印
泊り浦 利三郎 印
鶴 松 印
鶴 蔵 印
七郎兵衛 爪印
櫃石しま 勘次郎 爪印
（早生しま） 右兵衛 印

一 春山 弁蔵
小原 勇次郎
岩田 平作
浅野 勇之助
右は御船打建御用所其外御筒鑄建并御筒台仕立所兼帯ニ御座候

御船棟梁 東浦賀 粕谷勘左衛門

差上申御請証文之事

一 相州於浦賀表御製造ニ相成り候 御軍艦水夫御用之儀、嶋方水夫共被 仰付、年々三拾人宛一ヶ年彼地に相詰メ、右詰中は糶米被下置、交代之儀は例年四月と取極り御座候ニ付、此度私とも御召之上、浦賀御奉行所に御引取ニ相成り候旨、被 仰渡奉畏候、右ニ付而は兼而御国恩之儀は勿論、御用柄等厚相弁、格別之出精相勤可申候彼地之御作法堅相守、於 御奉所ニ被仰渡候儀は何事ニ不寄、違背仕間鋪候、自然心違不埒之儀御座候節は、於御同所嚴重之可被仰付候、其旨相心得且彼地附之水夫と打混御用被 仰付候節は一同和合仕、私論を仕間鋪候、自然難心得儀は其御懸り衆に伺可申、就中当水夫陸敷精勤仕、身分相慎可申儀ヲ被仰論、是亦奉畏候、依而御請

よしま 与次兵衛 爪印
大浦 仲 蔵 爪印
福田浦 新 蔵 爪印
生之浜 権 吉 爪印
瀬居しま 寅次郎 爪印
高見しま 勝次郎 印
宇左衛門 爪印
定 吉 爪印
沙弥しま 徳次郎 爪印
尻浜浦 仙三郎 爪印
手嶋 角右衛門 印
伊 八 爪印
幾 蔵 爪印
佐柳嶋 喜兵衛 爪印

牛嶋 甚兵衛 印

笠石浦 伝 七 印

江之浦 文右衛門 爪印

茂浦 平右衛門 爪印

一井浦 六右衛門 爪印

青木浦 久右衛門 爪印

右被 仰渡之趣奉畏候

外御用ニ付在番

年寄 宮本清三郎 印

御奉行所

乍恐口上
一 塩飽水夫共此度御召被為成、三拾人之者共内職之儀御尋
ニ付、乍恐左ニ申上候

但し 船小道具直し候者も御座候
網すき候者も御座候
わら仕事仕候者も御座候
筈あみ候者も御座候

右之通ニ御座候ニ付、乍恐此段奉申上候、以上
嘉永七寅年三月廿三日
御奉行所 塩飽嶋水夫前書
宮本清三郎

一千六百石積 成光丸

塩飽嶋水夫拾人為乗下り候積り、明廿四日夕晴天ニ相成り、廿六日出帆

一千六百石積 嘉宝丸

塩飽嶋水夫拾人為乗下り候積り、廿四日夕晴天ニ相成り、廿六日出帆

一千六百石積 明通丸

樽廻船問屋 西田屋正十郎船
沖船頭徳太郎乗
船頭水夫とも
拾六人乗

塩飽嶋水夫拾人為乗下り候積り、廿四日夕晴天ニ相成り、廿六日出帆

御奉行所

右之通ニ御座候ニ付、乍恐奉申上候、以上

菱垣廻船問屋惣代

南本町上半 小堀屋新兵衛 印

富嶋二丁目 塩屋藤十郎 印

嘉永七寅年三月廿三日 代九兵衛 印

安治川北一丁目 西田屋正十郎 印

代儀 八 印

御奉行所

乍恐口上

一 此度私共三拾人之内拾人宛、商内荷積船之便リヲ以、浦賀 御奉行所之御添翰一通宛御渡被下成、慥ニ奉請取候、差上置候御請証文之通相心得、彼地着次第二右 御奉行之差上可申候、依之書付ヲ以此段奉申上候、以上

讚州塩飽嶋水夫三拾人之内 重立候者

善太夫 印

角右衛門 印
忠兵衛 印

塩飽嶋水夫名前書

善太夫 寅四十六年

慶藏 三十七年

清助 四十二年

市兵衛 五十六年

勘次郎 三十二年

利三郎 四十四年

鶴藏 三十九年

鶴松 三十六年

七郎兵衛 三十七年

与次兵衛 三十一年

右は当表菱垣廻船問屋小堀屋新兵衛船沖船頭半右衛門乘
成光丸ニ為乗組、廿六日出帆申付候
(註) 以下、明通丸・嘉宝丸の分は、成光丸と同様故、出身地と乗
組名と年令を列記する)

- 手嶋 角右衛門(五六)、伊八(三〇)、幾蔵(二六)
- 佐柳嶋 嘉兵衛(三五)
- 牛嶋 甚兵衛(四八)
- 笠石浦 伝 七(五一)
- 江之浦 文右衛門(四七) 茂浦 平右衛門(五一)
- 一井浦 六右衛門(四三) 青木浦 久右衛門(四八)
- 右は当表樽問屋西田屋正重郎船沖船頭徳太郎乘明通丸ニ為
乗組、廿六日出帆申付候
- 早生浦 忠兵衛(五六) 大浦 仲 蔵(二八)
- 福田浦 新 蔵(四〇) 生浜浦 種 吉(四八)
- 瀬居しま 寅次郎(二二)
- 高見嶋 勝次郎(三八)、宇右衛門(三九)、定吉(二二)
- 沙弥嶋 徳次郎(四一) 尻浜浦 仙三郎(四四)

大坂表々浦賀迄下海上并諸日記控
(註 嘉永七年)
大坂表三月廿六日出帆、伊勢国的屋に四月四日入津、九

勤、夫々暫之内御乗試等も無御座候ニ付、当時船同様
ニ仕候処、十月廿五日江戸表々十人目付岩瀬修理様・山
口勘左衛門様当所表海岸御備場御見分ニ付、其御軍艦
も御見分可有之と御船拵と致し候処、折あしく江戸表々
急御用有之候由ニ而右御兩人直様御引取ニ相成り、御懸
り方ニも御残念之様子相見得候、乍併船拵迄致シ候得は
トテ、当所御役人斗リニ而乗可出スと塩飽武拾七人・浦
賀水夫拾三人ニ而又此度も房州近ク迄乗出シ、為箇揃と
本玉ヲ被入候処、其響百千之雷が落コトク誠ニ夥敷、其響
ニ而ハツテラ三艘立サケニ相成、同日七ツ時無難ニ而着
船致、何事も前書之通ニ御座候、十一月四日朝五ツ半時
頃々大地震ニ相成り、四ツ半時頃々津浪ニ而誠ニおそろ
敷事ニ候、乍併うら賀表は格別之損しも無之候得共、豆
州下田辺は殊之外大津浪ニ而人家も九百五拾軒も流損致
し、人も八拾人程流死致し、難有事ニは白昼故ニ人損は
少シニ候、且又四日々十武三日迄は少々宛ゆれ候様ニ候
(註 十一月四日ノ誤)

申沖ニ而水船ニ相成り、積荷物小麦三百石程も積入、是
は彼とが稗麦と相見得候、大筒は下田に揚置候得共、小
筒沢山積入有之由ニ而次第ニ船沈、櫓も相見得申、尚
又作事ニ廻シ候節、伊豆国孫屋船六百石積一艘買受、作
事中之間宿船ニも可致と相見得候、此船も破船致し候、乍
去ヲロシヤ宅人も無別条、戸田表に揚居候、十二月九日
亞メ利加蒸気船一艘、下田表に入津致し、然ル処アメリ
カ・ヲロシヤ格別之懸意之様子ニ相見得候、十二月十二
日ニはフランス船が日本風流人式人乗、下田に参り、右
式人之者揚置、直様帰帆致し、跡ニ而承り候而フランス
・ヲロシヤ何角先ニシテ遺恨も有之様子と相見得、追打致
し度と願出候得共、於御奉行所ニ御聞濟無之候間、ヲロ
シヤ人も残念之様子ニ相見得候
(註 安政二年)
正月六日ニは下田表之蒸気船帰帆致し候事
正月廿七日亞メ利加々千六百石積程之船下田に入津致、
此船は遊船とも存し、女人も三人程乗居候
右破船致し候ヲロシヤ船、豆州戸田ニ而七、八百石積程
之船新造仕立ニ而、卯年三月廿五日ニは戸田表出帆致し
尤大筒は下田ニ有之、人も残り居候
塩飽嶋水夫交代之儀は正月拾五人、六月拾五人と御取極
り候ニ付、此度正月交代之者名寄

日迄彼地ニ滞船、翌十日順風ニ而十一日浦賀表に入津、同
日七ツ時御軍艦鳳凰丸に乗込、同月十六日当所 御奉行
戸田伊豆守様の水夫一同被召出、大坂同様之御請証文差
上、五月十日ニは善太夫・角右衛門・忠兵衛・利三良右
四人之者被召出、御船船頭役被仰付奉畏候、翌十一日御
船乗試ニ付、当御奉行様始御乗組之御役人方都合六拾人
其外下田役人拾人・浦賀水夫三十人・塩飽水夫三拾人、
外ニ医師・大工職人惣乗組、合百三十人ニ而十一日朝五
ツ時御番所御沖ニ而大筒ヲ放シ、又陸よりも大筒ヲ放シ、
其煙の中ニ而帆ヲ巻、房州洲之崎辺迄走り出、夫々上風
廻しに致、同日七ツ時ニ無難ニ而乗納申候処、殊の外乗
廻し宜舖候ニ付 御奉行様が為御褒美御樽肴料被下、難
有頂戴仕、猶又御懸り御役人方々も大キニ御欲被為遊、
為御褒美右同断被下、又棟梁も酒肴と迄被下候、又五
月末ニ 御奉行様御替り被為遊、後役松平伊予守様ニ相
成り候ニ付、又六月二日ニ御船乗試可致旨、被 仰出奉
畏候、則松平伊予守様始御懸り御役人方一同御乗船ニ而
前書之通乗出候候、俄ニ風雨ニ相成り、沙行あしく、
三崎表迄流され、彼地ニ一宿滞船ニ而翌三日晴天南風ニ
相成、無難ニ而着船、然ル処当夏は暑氣厳敷候故、御上
様が当所洲崎と申処に御長家ヲ被下置、則七月廿三日ニ
御長家に引移り、三拾人之内拾人宛相番ニ替り、ニ相

与しま 清六
高見嶋 多右衛門
牛嶋 常右衛門
江之浦 嘉吉
手嶋 庄七
一井浦 与吉
笠嶋浦 松蔵
定次郎
泊り 藤吉
櫃石 勘蔵
尻浜 市蔵

右七人之者撰州伊丹森本や亀太郎船有徳丸沖船頭長十郎
乘ニ而使船罷下り申候

大工職 貳人
鉄砲師 貳人
与力方小者 七人
水夫 四拾三人
内三拾人塩飽
ノ拾三人浦賀

右足輕衆拾貳人

監師 栗山 周輔
御船御用達 勘左衛門
重五郎

(註安政二年)

一 卯二月廿七日曉六ツ時、一同船中へ乗揃、湊口へ御船懸り留、五ツ時御奉行様御乗船ニ而、空砲壹発宛打之、即刻御上陸ニ而直ニ帆ヲ卷、鴨井沖ニ而式發打之、九ツ半時ニは品川船懸り場々は半里程も沖ニ懸り留、同日八ツ時ニは着届ケト樋田多太郎様、添役ニは小原勇次郎様・中田辰蔵様御三人ハツテラニ而被罷越候

一 河野四郎左衛門様時候当り船心も有之候や不快ニ而医師付添上陸之事

一 御書為持參と佐々倉桐太郎様、添役ニは後藤信八様御兩人ニ而是もハツテラニ而被罷越候事

一 着御届ケ被罷越候樋田様・小ハラ様・中田様、廿八日八ツ時ニ帰船有之候、御奉行様ニは早速御登城被遊、御下城ニ而御見分之沙汰可有之と存し、右之訳は在勤岡田増太郎承り可罷越積リニ御座候事

一 御船為見廻りと御船手松井藤四郎様・御目付鈴木尚太良様・御小人目付三橋慶太郎様・山田八郎様被罷越候而、

右八人之者大坂安次川日野屋富五郎船沖船頭誰乘に便船ニ而罷下り申候 住光丸
御船鳳凰丸御見分之節御乗組御名前左ニ印

中嶋 三郎輔
佐々倉 太郎
桐村 八郎
松源 太郎
朝夷 次郎
細淵 新太郎
右与力方七人

福西 源兵衛
白井 進平
土屋 仲五郎
同屋 次郎
田中 忠次郎
春山 右衛門
吉村 貞弘
浜口 眞衛門
岩田 勇次郎
小原 次郎
西山 辰蔵
福山 辰蔵
中田 辰蔵
金沢 種助

大浦 周蔵
林 蔵

右同心衆貳拾八人
松田 政兵衛
羽根 武衛門
山根 武衛門
野田 武衛門
平忠 武衛門
立井 武衛門
長野 武衛門
加藤 武衛門
田野 武衛門
加藤 武衛門
坂野 武衛門
鈴木 武衛門

一 日々見廻りに可罷越旨被申聞候、御船御案内ニは樋田様外ニ福西源兵衛様右御兩人ニ而御案内相濟申候事
一 在勤岡田増太郎様、添役ニは田浦福太郎様兩人ニ而御船に被罷越候
一 但、御書封一通御持參ニ而中嶋氏に御渡し有之候、是は数々御達シ之旨と相見得候

一 右ニ付福西源兵衛様同夜四ツ時ニハツテラニ乗、御役所に被罷越候、河野氏全快ニ而廿九日ニは医師同船ニ而帰船之事

一 佐々倉・浜口・土屋右御三人御用相濟帰船之事

一 明晦日ニは諸役人方御見分有之候由御達し御座候、其御ニは御奉行早朝御乗船之御沙汰有之候事

一 御老中方始諸御役人御見分之節は中嶋・佐々倉先ニ立、御案内可申上、御尋之儀は直様可申上旨、御沙汰有之候右兩人ニ而は外々御見分方一々御尋之儀申上兼候ニ付外与力・同心ニ而も御尋之儀は可申上候、尚又上之段ニ而之御尋有之候節は足輕・水夫ニ而も不苦可申上旨、御達シ有之候事

一 二月晦日晴天北風御船大森沖ニ懸り居候処、品川御備場近夕迄、諸廻船解ニ而為引、朝五ツ時ニは 御奉行豊前守様・曾根金三郎様御同船ニ而御出被成、御乗船ニ而御見廻り打済、将官部家ニ而与力・同心衆へも此度御見分

二付、御船乗込候儀ヲ御登察有之候

御見分之節衣服之儀は与力具足下タチ付ニ而、同心紋付

ニ而タチ付之沙汰有之候事

同日九ツ時御見分被遊候御役人方追々御乗船之事

御老中 十老万石、備後福山 御目付 三千石

阿部伊勢守様 松平河内守様

〃 五万八千石、下總関宿 三百石

久世大和守様 鶴藤民部少輔様

〃 五万九千石 内藤紀伊守様 西御丸御留守居、二百七十五石

若年寄 三万石、下野壬生 二之御丸御留守居、九百俵

鳥井丹後守様 下曾根 金三郎様

〃 万二千石、江州三上 御勘定吟味役、百俵

遠藤但馬守様 村垣与一郎様

〃 野州高富 同 岡田喜利次郎様

本庄安芸守様 箱館御奉行、三百俵

御側衆 御老中 堀 織部正様

本多丹後守様 御奥御祐筆、百俵

〃 二万石 平岡丹波守様 竹村七左衛門様

平岡石見守様 同 立田 録 輔様

大目付 御小姓考御番頭、五百石 同 中村又兵衛様

外ニ 御小人目付 御徒目付 御勘定懸り

一 右衆御見分相濟、夫ケケウエール調練、統而大筒一發宛

御見分請候処、御好ニ付又壹發宛打之、夫目付衆は跡

〃、外は赤船ニ乗移り、鳳凰丸之模様御見分ニて直様御

引取ニ相成り申候

一 御見分砌大筒打候者之名前書差出スヘク候様御

沙汰有之候ニ付、右名前書差上申候事

御奉行豊前守様御船御引取之節被仰候様、船中一統相慎、

内外共警衛之趣ニ付、猶此上共相慎可申旨、御達し有之

候事

一 御見分相濟候ニ付、御礼旁御用為伺と中嶋様添役土屋榮

五郎御兩人ハツテラニ乗、御役所ニ被罷越候

一 堀伊豆守様御家来五人、三月二日御奉行所ニ御願候而割

印持參ニ而拜見之儀被申候ニ付、印引合相違無之ニ付、

拜見之事

一 高輪東禪寺ケも五人割印持參拜見之事

員數之事 中嶋三郎輔 佐々倉桐太郎

一 龜服 一反宛 与力方六人

一 金千四百疋 同心組頭式人

一 金三百疋 同式拾六人

一 金式千六百疋 足輕拾式人

一 金六百疋

分ニ而直様御引取之事

一 猶又七日御見置とし而外御役人方御乗船有之候

小普請支配 五千石 御書院組頭 三千石

小笠原順三郎様 津田美濃守様

〃 四千五百石 同名 弥八郎様 〃 五千石

〃 二万石 邊見豊前守様 〃 七千石

〃 四千七百石 仙石右近様 〃 三千石

〃 小倉新右衛門様 御小姓番頭 三千石

〃 岩瀬市兵衛様 〃 戸川伊豆守様

〃 市原勘三郎様 御小姓番頭 五千五十石

〃 近藤遠江守様 〃 白須甲斐守様

〃 〃 〃 〃 徳永伊予守様

〃 〃 〃 〃 春日半五郎様

〃 〃 〃 〃 本多因書様

〃 〃 〃 〃 横田新五兵衛様

〃 〃 〃 〃 酒井宗三郎様

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

御藏番頭 五千石

溝口贖岐守様

〃 五千石

〃 柳播摩守様

御書院組頭 四百俵

松浦金弥様

〃 三百俵

〃 福玉忠左衛門様

〃 四百俵

〃 方年弥一郎様

右衆拜見相濟御引取ニ相成申候事

銀 式枚宛

中嶋三郎輔

佐々倉桐太郎

銀 式拾枚

与力・同心

乗組之者共々

御小姓組番頭

五千石

酒井備中守様

〃 九千五百石

〃 横田筑後守様

〃 四十石

〃 久永石見守様

〃 三千五百俵

〃 赤松右衛門尉様

相濟、御引取ニ相成り候事

御船明十三日朝五ツ時出帆可致旨

御奉行土岐様被申

達候ニ付、御請とし而柴田仲助様御役所被罷越候、出

帆御請相濟、柴田氏婦船ニ而御船一同、明十三日之出帆

之用意ニ而曉十三日九ツ時ニは浦賀着ニ相成り、目出度

一統安心と遊し候事

先達而破致シ候ヲロシヤ船、今般豆州戸田と申処ニ而新

造ニ代船出来候ニ付、江戸表御役人御出被遊、浦加

ハ中嶋様・佐々倉様・大工棟梁式人被召遣、戸田表へ右

之ヲロシヤ船之形ヲ取ニ被罷越、浦賀表ヲ三月十五日出、

四月七日ニは帰宅之事

長崎表に為伝習被差遣昇平丸船中乗組之面々御名前

船中御取締

御細工頭格

御徒士目付組頭

依田源十郎

小十人

善左衛門組

矢田堀京藏

同

松前三郎兵衛組

勝 麟太郎

同 鍛治方

七助

虎吉

喜太郎

菊太郎

御小人目付

橋本鉄四郎

吉岡元平

同

松平薩摩守家来

船頭水主取締役

池田壯左衛門

長崎深吾

今村源右衛門

外ニ乗組被仰付候

肥後七左衛門

梅田市藏

昇平丸御船

船頭

波江野嘉兵衛

水主稽古

二之方松右衛門

藤田孫太郎

河野正左衛門

益満次郎助

瀬戸口助太郎

下曾称金三郎伴

下曾称 次郎助

浦賀奉行組与力

中嶋 三郎輔

佐々倉 桐太郎

同 同心

土屋 忠次郎

春山 弁藏

岩田 平作

浜口 奥右衛門

山本 金次郎

金沢 種米之助

飯田 敬之助

江川太郎左衛門組

御鉄炮方手代

鈴藤 勇次郎

望月 大象

岩崎 源八郎

石井 脩三

長沢 綱吉

浦賀船大工

熊蔵

長吉

江川組船大工

駒次

御船明十三日朝五ツ時出帆可致旨

御奉行土岐様被申

達候ニ付、御請とし而柴田仲助様御役所被罷越候、出

帆御請相濟、柴田氏婦船ニ而御船一同、明十三日之出帆

之用意ニ而曉十三日九ツ時ニは浦賀着ニ相成り、目出度

一統安心と遊し候事

先達而破致シ候ヲロシヤ船、今般豆州戸田と申処ニ而新

造ニ代船出来候ニ付、江戸表御役人御出被遊、浦加

ハ中嶋様・佐々倉様・大工棟梁式人被召遣、戸田表へ右

之ヲロシヤ船之形ヲ取ニ被罷越、浦賀表ヲ三月十五日出、

四月七日ニは帰宅之事

浦水主
花田平次郎
児嶋市郎
村尾林右衛門

吉太郎
紋太郎
榮藏
孫市
仲次郎
滿五郎
太助
平藏
市次郎
清太郎
岩五郎
十太郎
太吉
小太郎
源太郎
嘉吉
甚左衛門
六兵衛
利右衛門

矢田堀京茂内侍

塚本植輔
堀尾禎輔
石橋見作
中沢見作
名泉弥吉
高橋昇吉
高橋重吉
甚五郎
勝麟太郎内侍

岩崎旗之助
赤松清五郎
増田鎌介
佐藤与之助
安場敬之助
釜范庄左衛門
大川半次郎
西川要作
彦助
下曾次郎助内侍
塩田秀次
高橋慎八

貞助

讚州塩飽嶋船頭

嘉吉
倉本多左衛門
表役
大倉常右衛門
水主

文七
佐吉
幸吉
勘助
重兵衛
林藏
市藏
嘉助
定次郎
辰藏
金藏
伊八
依田源十郎内侍
江場六造
井内圓次郎
常吉

中嶋三郎助

長藏
渡辺
若党
佐々倉桐太郎
浦賀同心
新藏
幾次郎
弥三郎

梅原小三郎
木村半次郎
角藏
兵衛
彦右衛門
橋本鉄四郎
吉岡元平
吉岡小者

幸吉
甫助
清水平
池田壯左衛門
肥後七左衛門
清水平
半兵衛
半次郎

長崎 深吾
小者

吉五郎

薩州家尾輕

黒江 巳之助
川畑 仁平太

七番御台場 河越

松平大和守様

二番 会津

松平肥後守様

三番 忍

松平下総守様

五番 庄内

酒井左衛門尉様

六番 敦賀

真田信濃守様

品川海奉 因州

松平相模守様

(註) 下の図版が
ここに入る)

塩飽牛嶋

峠 嘉吉

